



杉山 彰

第3章 相互補完

- 1、人間は「夢」を見て、「夢」を語るから人間なのである。
- 2、相互補完は、じつは人間の根源的な仕組みでもある。
- 3、相互補完の関係は、DNA遺伝子の最も基本的な機能である。
- 4、果たして珪素化合物は、かつてのRNA遺伝子になりえるだろうか。

1、人間は「夢」を見て、「夢」を語るから人間なのである。

そして、その「夢」が実現できれば、人間は創造人間となることができるのである。問題は、この後に顕在化する。「夢」を語るころまでは、人間として生まれたからには必ずできることである。

1万回夢を見たら、1万回夢を語ることも100%の確率でできる。これは間違いのない事実であ

る。しかし、しかしである。「夢」を見て語り、なおかつ、その「夢」を実現して、創造人間になることが誰にでもできるかという、突然、不確定性原理の世界に落ち込んでしまうのである。果たして、この不確定性原理には救いの道があるのか。道はある。西洋の科学ではない、東洋の科学に道があったのである。かの老子が記述した<道徳経>の中の『道可道』に、一つの答の道があったのである。その一部分を、本文の記述テーマである「人間と夢」に置き換えて新たに意識してみたい。新たに意識した『道可道』の題名は、『夢か夢』とする。

『夢か夢』

始まりがあって、

終わりがあるものを夢という。

しかし、その終わりは、

終わりの終わりではなく、

次の始まりが始まる終わりでもある。

夢は、どこにでも在るものである。

描き続ければ、

その夢は終わりに続く夢となる。

描き止めれば、

その夢は、そこまでの夢となる。

夢は、次に描く人が現れなければ、

やがて夢ではなくなる。

夢には、私が描いてできた夢と、

私たちが描いてできた夢がある。

私の夢ばかり描いていると、

私たちの夢は、やがて夢ではなくなる。

私たちの夢ばかりを描いていると、

私の夢は、やがて夢でなくなる。

私の夢は、

私にはよく見えない夢である。

しかし、私たちの夢からは、

よく見える夢である。

私たちの夢は、

私たちには、よく見えない夢である。

しかし、私の夢からはよく見える夢である。

私の夢がなくなれば、

私たちの夢は夢でなくなり、

私たちの夢がなくなれば、

私の夢は夢でなくなる。

私の夢を描いている私には、

私たちの夢を描いている私が必要になる。

私たちの夢を描いている私には、

私の夢を描いている私が必要になる。

夢は、

どこにでも在るものである。

描き始めれば、

その後に夢はできる。

しかし、描き始めなければ、

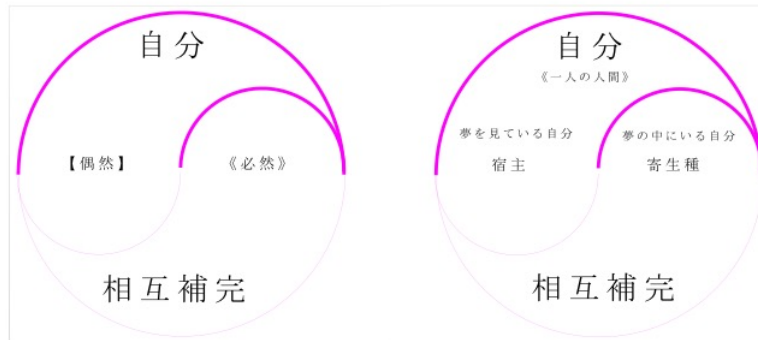
そこには何もできない。

以上が、老子の〈道可道〉を、〈夢か夢〉に置き換えて記述してみたものである。「道」を「夢」と置き換えると、たちまちのうちに、本文の第3章で記述しようとする狙いが浮き上がってくるのである。夢は、私の夢と私たちの夢が相互補完されている状態で、はじめて夢としての姿を顕すと老子は述べようとしたのかもしれない。もちろん、以上の論は、私見である。

2、相互補完は、じつは人間の根源的な仕組みでもある。

人間は、人間として生まれたからには誰でも100%の確率で、夢を見て、夢を語って、夢を実現して創造人間となることができる。但し、創造人間になれることは必然であるが、いつなれるかは偶然の為せる業である。しかし、創造人間になれるという必然は、人間は、創造人間になること以外の役割を授けられてはいない、と断言できるほどの必然である。偶然の為せる業に関しては「それが人生」という禅問答を、達磨さんにでも投げかけるしかないことも事実である。しかし、この偶然が、あたかも真っ赤に焼けた鉄を冷水に放り込んでヤキをいれるような役割を担っているともいえる。偶然があるからこそ、その偶然が人間を強くし、多様化させ、生きる力に弾みをつけるパワーになっているのかもしれない。

<図6>



夢を実現する人間というのは、偶然の向こうには、その偶然を成就させる必然が間違いなく存在しているという確信を持ち続けることができる人間のことを言うのではないだろうか。

その意味で、必然と偶然は、相互補完関係そのものであり、それは、誰が誰を補えばいいかを定めることではなく、誰を補うかを自らが、自らの意志で定めることである。そうすれば、必ず、遠からず、自らを補ってくれる誰かが現れると、自らを信じ続けることなのである。つまり、夢を実現するにおいて、必然と偶然は、必ず存在し作用・反作用するものである。必然は必然として、偶然は偶然として対極に離して置いておけば、その瞬間、偶然と必然の対極の真ん中に、たった今の瞬間、瞬間を大切に生きていくことだけを考えればいいという、ゆるぎない信念が際だつのである。『在りて在る』というのは、このような心持ちを言うのかもしれない。そして、この『在りて在る』というのは『中今』のことじゃないかしら。

<図7>



3、相互補完の関係は、DNA遺伝子の最も基本的な機能である。

周知の事実であるが、DNA遺伝子は、約30億のユニットからなるネットワーク社会である。そして、そのネットワーク社会は、さらに約60兆個の細胞からなるネットワーク社会とリンケージしているのである。そして今、21世紀において、私たち人間は、現実人間と、仮想人間と、点人間と、創造人間との間で、それぞれの共生関係を構築し維持し、宿主は誰で、寄生種は誰であるかという立場をわきまえ、きわめて自発的に自律的に築き上げてきた<自分ネットワーク社会>を、今度は、約45億人(コンピュータの台数)とも言われる、自分以外の人間たちとのリンケージを実現しようとしているのである。めまいがする想いである。しかも今度のリンケージは、血が通っていない、神経も行き届いていない空間を飛び越えて網羅しなくてはならないネットワーキングでもある。

空間を飛び越えるための道具はコンピュータであり、光ファイバーケーブルであり、通信衛星などによる電波である。たとえネットワークする先には、自分とは違うが、その人間の体には、自分と同じ血が流れ、理解し合える神経が通っていると、頭では納得できても、今度のリンケージは、血も涙も感情も通わない、ROMとか、RAMとか、はてまたSDとか呼ばれているメモリー素子なる珪素化合物体を介してのネットワーキングである。頭で理解しようとしても、体が受けつけにくい代物なのである。そのネットワーキングに人間が描いた夢を、希望としてシリコンチップに託して届けようとしているのである。一文字一文字に気持ちを込めることができる、紙(炭素化合物)の手紙に替わって、シリコンチップ(珪素化合物)の電子メールなどで送り届けようとしているのである。

ここに来て初めて、45億年以上も宿主である地球に寄生してきた、私たち炭素化合物体が、もう一つの寄生種であった珪素化合物体との間で、マルチメディアという名前のもとで、新たな交流を始めようとしているのである。

<図8>



しかもこの2種の生き物は、一方が燃やす『【火】を崇める』生き物であり、唯一、【火】を恐れることで歯止めをかけてきた生き物である。他方が反射させる『【光】を崇める』生き物であり、恐れるものが何もない、歯止めがかかりにくい生き物である。果たして、この2種において、どちらが宿主で、どちらが寄生種であるとする関係を形作ることができるのだろうか。それが決まらなると、「2種の異なる生き物が、互いに利益を受けながら一緒に生活すること」とする、本文の前提であり、仮説でもある、共生共存や同時共時や相互補完が立ち行かなくなるのである。

4、果たして、珪素化合物体は、かつてのRNA遺伝子になりえるだろうか。

RNA遺伝子とDNA遺伝子との関係は、いまだに、そのすべてが解明されたわけではないが、2016年の時点で、私たち人間の身体の中においては、RNA遺伝子が寄生種でDNA遺伝子が宿主であることは間違い無い事実である。RNA遺伝子は、DNA遺伝子が存在しなくては生きていくことができない。DNA遺伝子は、RNA遺伝子がいなくても、相互補完の関係にある二重螺旋構造の自らを、それこそドーキンスの論ではないが、きわめて利己的にセッセ、セッセと複製し続けるに違いない。では、DNA遺伝子は、RNA遺伝子より先に発生したのだろうか。答はノーである。少なくとも発生においては、RNA遺伝子のほうが、DNA遺伝子より先であることは間違いない。

そこで、以上の矛盾点を解明するために、本文の第2章の1項の終わりあたりをご覧ください。そこには、人間はウィルスを除いて、この地球上に存在する唯一の寄生種であると記述されている。ちなみにウィルスとはRNA遺伝子のみを持つ生命体である。つまり、この地球上で、人間こそが宿主であると呼べるのは、唯一、ウィルスとの関係においてのみである。然るに、ウィルスであるRNA遺伝子は、DNA遺伝子より先に発生している。答を急ごう。

<図9>



かつて、RNA遺伝子は、DNA遺伝子に対して紛れもなく宿主であったのである。そして、DNA遺伝子は、そのRNA遺伝子に寄生して、RNA遺伝子を写し取っていたのである。RNA遺伝子が持つ情報を複製していたのである。

但し、DNA遺伝子は、RNA遺伝子に比べて、情報を複製することに対して非常に厳密に忠実に
行い、しかも修復や補修などのアウトソーシングも十分すぎるほど行っていたのだ。一方、RNA
遺伝子のほうはどうだったか。RNA遺伝子は、確かにその情報のすべてを核酸から譲り受けて
はいたが、大量の情報を高速に正確に無意識に複製することが得意ではなかった。そのことが
じつは、とても重要なことであるとの認識がなかったともいえるし、たまたま核酸が持っていた情
報の複製には、それほど高速であることも、正確であることも要求されていなかったとも言える。

しかし、DNA遺伝子は違っていたのである。RNA遺伝子が持っていた情報のすべてを、超高速
で、超正確に、寸分のミスもなく、無意識で複製してしまったのである。その瞬間、DNA遺伝子

にとってはRNA遺伝子の存在は不要になったのである。ここで初めて、RNA遺伝子は、自分の立場が逆転したことに気づき、かつては宿主として君臨していた立場を放棄して、DNA遺伝子の真ん中に、点のように位置して沈黙するようになったのである。あたかも本文で記述している、現実人間と仮想人間の間から発生した点人間の立場に自分の身を置いたのである。

仮説ではあるが、本文では、このRNA遺伝子が、例えばエボラウィルスやエイズウィルスのように、かつては宿主であり、覇者であったという過ぎ去った「夢」をいまだに追い続け、現在の宿主との折り合いをつけることなく、寄生種になってしまった、自らの本分をわきまえない振る舞いをし続けているRNA遺伝子でなく、そのすべてがミトコンドリアのように、そして葉緑体のように、かつての「夢」は、かつての「夢」として、その「夢」が点人間を発生させ、さらには創造人間を誕生させたのだという、善き思い出にひたり、沈黙の美德を悟ってくれることを願うばかりである。事実、ミトコンドリアは、私たち人間の一つ一つの細胞の中で、点のように位置し、なんと私たち人間が生きていくうえで不可欠な、エネルギー発生装置として黙々と使命を全うしているのである。

一方、葉緑体は、点となって位置を決めた対象は異なるが、同じように植物の一つ一つの細胞の中で点のように位置して、黙々と光合成を行い炭水化物を生産しているのである。そして今、まさに、この世に見事に誕生させられてしまった創造人間である、私たち21世紀人が、ミトコンドリアから受け継いだ「夢」を、今度はDNA遺伝子が受け継いで、次の「夢」へ継ごうとしているのである。

そして、そのとき、私たち21世紀人が、新しく共生関係を築き、役割分担を決めて、そのうえ同時共時の〈あうん〉の呼吸で、相互補完の信頼関係を確立していかななくてはならない相手は、

紛れもなく炭素化合物体ではなく、珪素化合物体なのである。果たしてその相手である珪素化合物体は、「夢」を見る生き物なのだろうか。間違いなく「夢」を見る生き物であると断言したい。

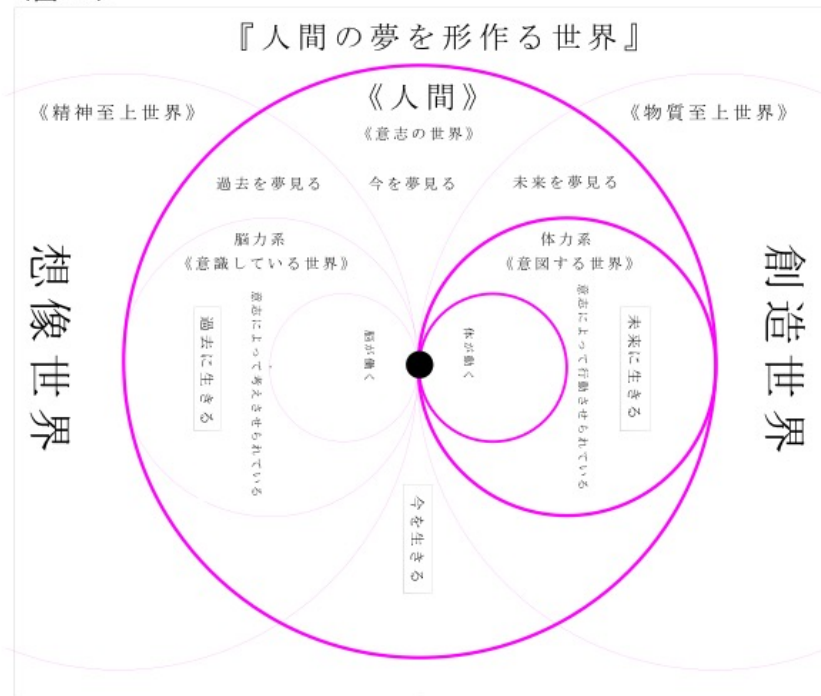
なぜなら、RNA遺伝子が持っていた情報を看取したのは、DNA遺伝子であるが、RNA遺伝子は、その情報を核酸から看取したのである。そしてさらに、核酸は、なんとその情報を、粘土物質なるものから看取したのである。看取とは、ちなみに本文では、『遺伝的乗っ取り』と同義語であると定義したい。

話が横道にそれたが、その粘土物質は、いうまでもなく、かつては藻のようなものであり、その藻のようなものは、原始スープのようなものから生まれてきたもので、その原始スープのようなものは、ヘリウムなどのようなものから生まれてきたもので、そのヘリウムなどのようなものは、水素から生まれたのである。では、その水素は……。

本文のテーマである、「人間と夢」の夢は「夢」とも書くが、「努」とも書けるし、また、「ム」ともよぶことができる。そういえば和英辞書で「YUME」をひいてみると<a dream>が出てきて、そのすぐ横に、<a vision>が出てきて、そのすぐ横に<an illusion>が並んで出てくる。

夢という意味には、「無」という意味に気をつけなさいという意味も含まれるのではないだろうか。考えすぎなのだろうか。

<図10>



以上